

山形国際ドキュメンタリー映画祭2025  
招待作品

座・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル2026  
正式出品作品

ドキュメンタリー映画

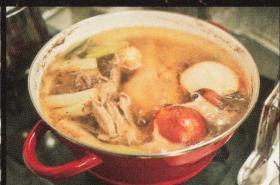
# ロッコク・キッチン

みんな、なに食べて どう生きてるんだろう？

原発事故から13年、

福島の国道6号線を旅して見つめた  
ロッコク

温かくておいしい日常



監督：川内有緒 + 三好大輔 音楽：坂口恭平

出演：スワスティカ・ハルシュ・ジャジュ 中筋 純 武内 優 ほか

プロデューサー：渡辺陽一 宮本英実 アニメーション：森下豊子 森下征治 サウンドデザイン：滝野ますみ スチール：一之瀬ちひろ 宣伝美術：新谷佐知子 高野美緒子 山田真沙美  
協力：板橋基之 高橋洋充 名喜陽一郎 根本李奈 福田一治 NPO法人20世紀アーカイブ仙台 一般社団法人双葉郡地域観光研究協会 読書屋息づぎ おれたちの伝承館

大熊町立学び舎ゆめの森 ベンギン 双葉町役場 テレビユー福島 東日本大震災・原子力災害伝承館 ほか 助成：ハマカルアートプロジェクト2023/2024 ハマコネ 宣伝：平井万里子  
2025年／日本／カラー／122分／16:9／DCP／ドキュメンタリー 制作：ALPS PICTURES INC. 配給・製作：株式会社植田印刷所 ©2025 Rokkoku Kitchen Project



EIRIN

このビデオは日本語です  
125325-A

決して 何かを強く主張するわけではない。怒りや悲しみを訴えかけるわけでもない。むしろ淡淡と登場人物の声を拾い上げ、綴っていく。

そこにあるのは、災禍の非日常ではなく、日々粛々と繰り広げられている私たち「ロッコクの民」の日常である。

小松理虔（地域活動家）

浜通り で生きることを選んだ、出身地や職業、国籍が違う人たちの「今」を知ろうと川内監督が不躊躇に発する「昨日の夜、何食べました?」という遠慮も媚びもない率直な声。全くもつて痺れるセリフである。

ヤンヨンヒ（映画監督）

東京電力  
福島第一  
原子力発電所

帰還 できた人も、できなかつた人も、移住をしてきた人も、「あなたがいま感じていることや、ここでつくりあげた日常はとても素敵ですよ」と肯定してくれているようである。意味「赦し」や「救い」を感じさせる映画ではないかと思います。

浪江町出身／ホームムービー提供者

高橋洋充



↑ 至宮城

どんなキッチンで何を作り、何を食べているのか。

ひとりなのか。誰かと一緒になのか。何を楽しんで、何がイヤで。

何を考え、何を忘れ、何を覚えているのか。

東日本大震災と原発事故から13年が経った2024年、監督の川内有緒と三好大輔は、東京と福島を結ぶ国道6号線（通称「ロッコク」）を何度も往復していた。

ロッコク沿いの一部の町は長く帰還困難区域となり、一度はすべての光を失った。

今そこでは、帰還した住民、移住者、仕事や復興のためにやって来た人々が入り混じり、モザイク模様の暮らしが形作られている。



2008年の双葉町郡山海岸を映したホームムービー

本作は、そんな異なる背景の人々の日常と人生を、軽やかに、かつ深く見つめるロードムービーである。キッチンに立つ姿、料理の香り、思い出される記憶、笑いあう人々の顔、語られる言葉、こぼれる涙——。



映像に刻まれた福島の新しい生活史。

「第35回 Bunkamura ドゥマゴ文学賞」受賞!  
書籍『ロッコク・キッチン』  
川内有緒 著 講談社  
2,090円（税込）304ページ  
川内有緒が映画と同時に書き下ろしたノンフィクションエッセイ。  
(写真:一之瀬ちひろ)

全国!  
順次公開。



2026年2月14日(土)より  
ポレポレ東中野  
03 3371 0088 pole2.co.jp

2026年3月6日(金)より  
K2  
シモキタ  
エキマエ シネマ  
k2-cinema.com